

「家族」と「写真のもつ力」

馬渡 徳子

今から五年前の夏のことである。実家の床上浸水時に、当時既に認知症が進行し在宅で療養していた父が、二階で「古いアルバム」をしっかりと抱きかかえて、救助を待っていた光景が、私は今も忘れられない。涙が止まらなかった。

父にとって、そのアルバムは、正に、私たち家族の知らない「外国で父が生きてきた証」であった。生涯の殆どを諸外国で過ごした父。72歳で正式に退任し、地元に戻っても、なかなか地元の生活に馴染めなかったらしく、自ら一線を引いていた。そんな父に、喜寿祝に、娘の私から「お父さん、最近ね、エンディングノートって流行っているらしいの。ちょっと素敵なの買ってきたから、私たち子どもの知らない、

お父さん自身の歴史を書き残しておいて欲しいなあ。」と伝えたが、なかなかどうして、一向に進まなかった。

そんな時に、認知症デイケアの介護福祉士さんとケアマネジャーさんの提案で、「外国から介護の勉強にきている留学生がいるので、その人の研究に協力して欲しい。英語が堪能な、〇〇さんにこそ、是非ともお願いしたい。」と、一芝居して、併設するクリニックの主治医（認知症専門医）から依頼頂くこととなった。それからは、デイケアに通う日には、父はアルバムを持参し、そこに、介護福祉士さんと看護師さんが、『付箋』で父の語るエピソードを「聞き書き」下さり、写真の横に貼ることとなった。相当嬉しかったのだろう。父はアルバムに、当時

の貴重な現地の新聞記事や設計図などをファイリングしたものを添付したりして、熱心に日本の高度経済成長期と、それ以降にも、更に諸外国に技術を輸出していった生き証人の一人として「語り部」となっていたのだ。

そう、そのアルバムは、父と介護・看護スタッフの信頼関係を構築する大切なコミュニケーションツールの一つだった。父の語る物語を、興味深く、真剣に、面白がって、理不尽な話には共に憤ったり、目を潤ませて下さったりしながら、粘り強く作成されたからに他ならない。その価値が十分に伝わっていたからこそ、父は、災害時に、そのアルバムを抱きかかえて守ることを最優先する選択をしたのだった。

私は、この経験から、災害時に備えて、いつか「家族のアルバム」をCDROMと一冊のアルバムに、まとめておけたら良いなあと、そのタイミングを見計らっていた。

その機会が、昨年春の大がかりなバリアフリー工事時にやってきた。改めて、亡義父が、馬渡家の歴史を、40冊以上も脈々とアルバムに綴っていて、「家族の転機には必ず写真館で家族写真を撮ることが、お約束事になっていた」ことに気付いた。初めは、昨年冬に義母が倒れたことから、父の時のように、義父母の出会いから現在までの馬渡家の歴史をアルバムにまとめることが、義母自身にとって「写真を通して、自分たちの強みを確認ができ、これから生きる意欲につながると良いなあ」と、お節介な私が、一人で勝手に願っていた。その後、今年が私たち夫婦の結婚 35 周年にあたり、また偶然にも、子どもの内、二世帯が家を建てる年になることに気付いた。

家の内装が大きく変わる前に、義父母と私たちが大切にしてきた思い出を写真に遺したい。子どもたち世代に、手渡せたらなあと思った。

さて、どなたに、このプロセスを依頼できるだろうかと考えていたところに、職場の同僚が、お孫さんの七五三の写真を見せて下さり、その写真に一目で魅了されてしまった。なんとも、その家族の日常風景が、温度や空気感を伴って、聞こえてくるようだった。また、カメラマンの人を観る温かい視線、その家族らしさが現れる(+表れる)瞬間を待つ粘り強さまでも、感じとれるような写真だった。

このカメラマンさんにこそ、家族の歴史を綴るアルバム作成を依頼したい!

その思いを連れ合いと義母、子どもたちに伝えた。一年をかけて過去の写真から取りまとめた写真、めいめいで、また複数で、折に触れてピックアップし続け、カメラマンさんに義母へのインタビューをお願いした。また、大がかりなバリアフリー工事の前後の写真も、新たに撮って頂いた。

とりわけ、新築時に二世帯同居となった経過から、「その日に仏間で撮った写真」の立ち位置と、「同じ立ち位置で義父の仏壇の前で撮った現在の写真」は、何度観ても、このメンバーで、いろいろあったなあ、しんどいこともあったけれど、一日一日を前に進めてきたのだなと、感慨深い。

馬渡家とペットの歴史についても話が盛り上がった。大阪時代の柴犬→大阪から一緒に転居した凜とした三毛猫→亀→金魚→ハムスター。いずれも、庭に丁重に埋葬したので、その場所を重機が通ったり、仮の物置にされ

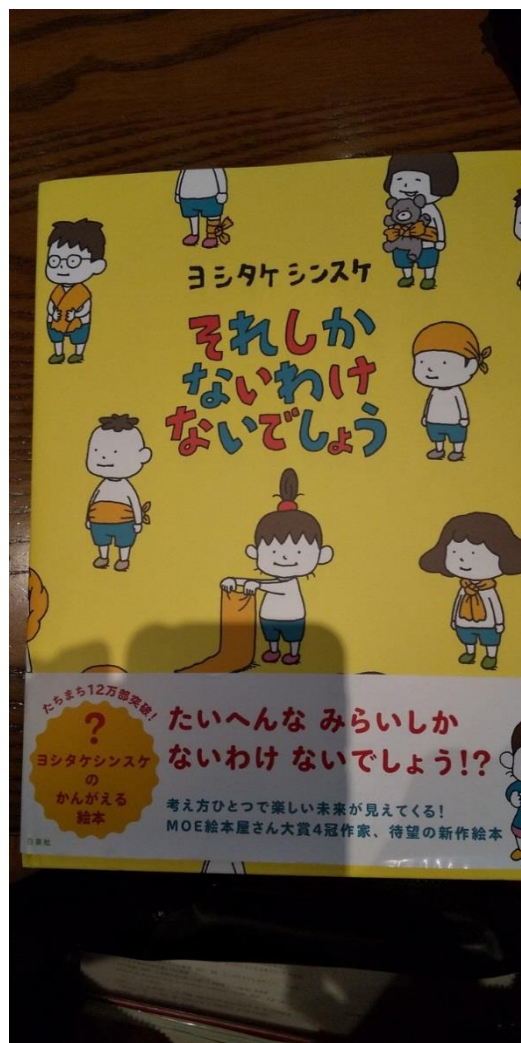
ることを子どもたちは強く拒んだ。そんなエピソードを、カメラマンさんは、取り上げて下さり、特に、子どもたち自身の意思だけで飼うこととなり、病気の看病をし、看送った二匹のハムスターは、アルバムの裏表紙に登場している。また、私のパソコン待ち受け画面にも、歴代ずっと表示し続けている。私にとっては、子どもたちの成長の記録の象徴の一つとなっていて、三人でハムスターのケアを最期まで責任もってやり遂げ、「命の尊さ」を学ばせて頂いた思い出深いペットでもある。

このプロセスで、同じ写真を観ても、その時の状況をどう語るかは、本当に、人それぞれで面白かった。特に、家族の転機に義父の意向で撮り続けた家族写真は、立ち位置や選んだ服装が、その当時の家族間の距離やパワーを表していて、カメラマンさんに見事に言い当てられて、本当にびっくりした。そこで、自分で改めて、その時代毎のジェノグラムを書いてみると、我が家族の構造の変化と、ずっと変わらない構造を、率直にふりかえることができた。

カメラマンさんから、「お二人の結婚式の誓いの言葉も見つかったので、この節目に、お互いに宛てた手紙を書いてみられませんか？ 完成したアルバムは、家族の記念日に手渡し致しましょう。」とご提案頂いた。家族の記念日は、三月の私たち夫婦の結婚記念日と、四月の義父母の結婚記念日があったので、丁度ゴールデンウィークにあたり、家族が温泉に集合する後者にし、お披露目となった。

なんと、そこに書いてあった私たち夫婦のそれぞれの目標が、短信に記載

した、偶然にも一致した「いつか安心して海を渡れる日が来たら、豪華客船クルーズに乗って、お互いを労い合おう！」だったのである。



私が大好きな絵本作家に、ヨシタケシンスケさんという方がおられる。彼は、とても哲学的な絵本作家さんで、『それしかないわけないでしょう』白泉社 の表紙帯に、「たいへんなみらいしかないわけないでしょう」とある。

時々ついている「付録」がまたいい。添付「みんなで考える それしかないわけないでしょうワークシート」。

私は、カメラマンさんに出逢って、家族の歴史を綴るアルバムを作成するプロセスから、以下のことを学んだ。

①過去は過去として、家族がそれぞれ自由に物語ればいい。

②もしかしたら、『語り直し』をするメンバーもいるかもしれない。それも、またいい。

③誰もが「〇〇してもいいじゃない」という『未来スイッチ』に切り替えることができる力も持っていて、それは、発すると、願いが叶う可能性が高い。

こうして、「家族の歴史を綴るアルバム」は、災害時には最優先して持ち出す私の宝物の一つになった。

